

# 過疎集落における氏神信仰の実態

——高知県高岡郡の旧川口地区の氏子の語りから——

冬 月 律

## 目次

- 一 はじめに
- 二 問題の所在・目的
- 三 調査事例
- 四 おわりに

### 一 はじめに

筆者は平成二三年より、高知県高岡郡の一部地域を対象に過疎地域神社の実態調査を行っている。その調査の結果、過疎地域の神社が置かれていた状況を総じて言えば、依然として改善されておらず、具体的な対策を持たないまま現状維持の段階に留まっているところが多いことが明らかにになった。そして、地域神社における主な問題が、①祭り運営、②伝統行事の衰退、

③当番制の衰退、④神社合祀問題、などの外形的な変化（外部的条件の変化）に一定の傾向が見られることも指摘した<sup>①</sup>。しかし、そのような実態調査（アンケート調査）では、外部的条件の変化による問題は概観できたとしても、実際にどの部分があるように変化したのかを詳細に示すまでには及んでいない。

そのような課題を問題意識として捉え、本研究では、内部的条件の変化、つまり地域の神社（氏神信仰）に対する氏子意識の現状と変化について、氏子を対象に行ったインタビュー調査の実践を言及しながら把握していくことを最たる目的としている。

また、本研究のもう一つの目的には、ライフストーリー研究を宗教社会学の中に位置づける実践を試みるものである<sup>②</sup>。ライフストーリー手法を用いて、日本人の多くが人生（生活）の中

で意識的または無意識的に表出される言葉や行動を宗教的意識の枠組みで再編成（捉え直す）することで、日常生活の中から非日常的・宗教的なるものを抽出していくことが可能になると考える。さらに、ライフヒストリー・インタビューに依拠して日本人の宗教観を探るには、さまざまな年齢層の人を対象に継続的に調査を行っていく必要があるが、その過程の中で、本研究で用いた調査手法が、氏神信仰に対する氏子の意識調査において有効であるかどうかの議論も可能になると考える。

## 二 問題の所在・目的

### 氏子意識の変化に関する二つの研究——相補的研究を目指す

氏神信仰の変容の問題は、神社界において昭和三〇年代から意識されてきた。急速な都市化の中で孤立的で個人主義的傾向の強い団地の住人と、連带的で協同福祉を目指す神社との関係の実態を明らかにしようとして、神社本庁が昭和三六年から翌年にかけて団地と神社に関する実態調査を行ったという経緯がある<sup>③</sup>。

氏子意識の変化について大まかな把握のために最も有効な方法は、「戦後の急激な社会変動に伴う氏子の生活様式のどの部分に変化が生じたのか、といった具体的な問題意識に着目した調査から読みとる」ことであろう。以下では社会変動に伴う氏

神信仰に対する氏子意識の変容について具体的な記述がみられる研究として、二つほど紹介しよう。まずは戸川安章「近代化と神道」委託調査報告「梶尾神社」調査報告（昭和四三年）<sup>④</sup>が挙げられる。調査は、日本の近代化による急速な農山村の解体過程に伴って、村落共同体にふかく根をおろしてきた神社の機能の変化過程を捉えることを目的として、部落（山形県鶴岡市馬町）の外部条件の変化から、神社、神職、祭、氏子生活、一般の信仰行事などの外形的な変化を中心に詳細な調査を試みている。この調査結果のうち、氏子意識の変化に関する質問「氏子や崇敬者の神社に対する態度に、終戦を境にして大きな変化が見られますか」の結果が、神職側と氏子側（古来・新）の意見にまとめられている点に注目したい。①経済的・時間的負担が理由で氏子離れを申し出るものがあらわれたこと、②祭りの期日を簡単に変えたこと、③祭礼を簡素化しようとするものがあることなどが著しい例であるとする神職の意見に対して、新氏子からは特別な意見はなかったものの、古来の氏子からは、①については、部落の氏神様だけでも大変なのに余所の部落の経費を負担することに疑問を抱いている、②についても人間の生活様式の変化が祭礼に及ぶことは当然である、などと、神職の意見にはそれなりの理由があつてのことであるとす意見が述べられている<sup>⑤</sup>。このような調査結果は、氏神様に対する氏子意識の変化が、情緒的から合理的で現実的なものに見

方・考え方に変わっていく様子を端的に示している例であると考える。

他方、近年の研究として石井研士の「氏神信仰の10年」神社に関する意識調査「から」（平成一九年）が挙げられる。調査は、急激な社会構造の変動に伴って日本人の生活様式や行動様式の変化を神社・神道と日本人の関わりの中から把握することを目的として、全体一八問からなる調査の結果を①氏神と日本人との関わりの現在、②「氏神」の認知について、③氏神への参拝の頻度、④氏神様のお札の有無、⑤氏神様の印象、の五つに分けて分析している。石井は調査の結論として、短期間（一〇年間）で氏神と日本人との関係の変化について、全体的に氏神様への認知が減少し、そのような氏神離れが大都市だけでなく、地方都市、町村でも確認できたことを示した。<sup>6</sup>

この二つの研究はいずれもアンケート調査、つまり量的調査（統計調査）による結果に基づいている。前述のように、統計調査では「概況」という枠を超えられないといった限界が課題として常に残る。この点については、戸川自身が調査報告の序文において、「内部と外部の複雑な変化と、これによる住民の意識変化が考えられ<sup>7</sup>」るが、とくに本調査が外部条件の変化に着目して行われていることを明らかに示している。また、石井も調査によって得られた回答が、回答者と「どのような具体的関わりの中から形成されているのか、世論調査からは明らかに

ならない<sup>8</sup>」と述べているように、地域を限定した実態調査が必要であると述べている。それらの問題解消に有用なのがライフヒストリー・アプローチであることは前述の通りである。しかしながら、ライフヒストリー・アプローチもまた、方法論をめぐって代表性（representativeness）・信頼性（reliability）・妥当性（validity）という問題（課題）を抱えているのである。<sup>9</sup> それらの議論はここでは避けることにして、本研究においては、ライフヒストリー・アプローチは量的調査や文献研究と相補的な関係にあり、より豊かな研究成果を挙げるために用いられる研究方法の一つであり、独善的な優位性を主張するものではないことを言っておきたい。

#### 本研究の目的

では、改めて本研究の目的について述べてみよう。前述のように、本研究の目的には、氏神信仰に対する氏子の意識調査において、ライフヒストリー・インタビュー手法が有効であるかどうかの議論を可能にする土台形成も射程に入れている。

過疎によって変化する社会の中で、氏子を含む地域住民の①普段の生活における近所付き合いの頻度、②例祭日以外に神社に参詣する頻度、③農業などでの共同作業（ゆいのような）の頻度、などの尺度をもって氏神様（神社）に対する氏子の意識変容を把握することが可能だが、それだけでは信仰の変容がど

のようなどころから見られ、どのような部分が変化したのかを論じるには足りない。それらの質問は独立した質問でありながらも立体的に表現されないと、ただのデータの並びになってしまう恐れがある。そこで、氏子を対象にインタビュー調査を質問形式に限定せず、氏子自ら語るライフヒストリーの内容、つまり生い立ちから普段の生活にいたるまでの話に氏神様との関連性をもつ部分を抽出し、分析する必要性が出てくると考える。当然のことながら本研究のために確保できた期間や対象者だけでは、前述に挙げたすべての事項を視野に入れた分析は不可能である。本研究ではひとまず、高知県内の過疎地域のうち、とりわけ少子高齢化が進んだ集落の神社における維持可能性が問われているとされる旧川口地区（現、高知県高岡郡四万十町南川口、以下、当地区と称す。）を題材にして、過疎の現状と地域神社の抱えている諸問題、そして氏神信仰に対する氏子意識をライフヒストリー・インタビュー<sup>10)</sup>によって可能な限り明らかにしていくことをもって最たる目的とする。

### 三 調査事例

本節では、旧川口地区の事例を取り上げて概観する。なお、当地区の事例では、①幼年期におけるお宮とのかかわり、②地域の変遷、③地区の祭り、④地域とお宮の関係などの四点につ

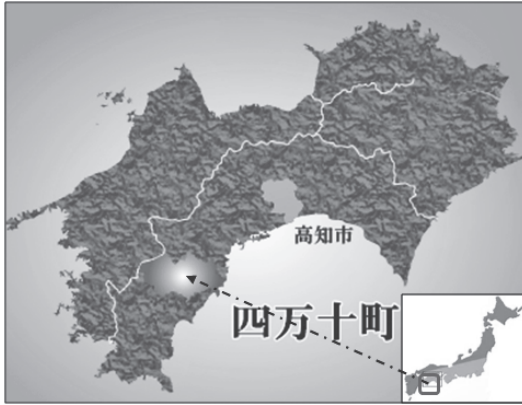
いて話者の発言を挙げながら分析を試みる。とりわけ、③地区の祭りについては、単なる祭りの運営だけでなく、例祭日の厳守がもたらす効果、直会で深まる地域住民間の交流、伝統芸能の衰退、当屋（頭屋）制度の変容も分析射程に入れている。

当地区のインタビュー調査は、平成二五年五月二三日（月）の午前九時半〜午後一時までの、三時間半にわたってSさんの自宅で実施した。インフォーマントに出会ったのは平成二五年五月であった。平成二三年より筆者の旧窪川町の神社の実態調査の協力者である高知県神社庁の幹部に論文執筆のための協力者を探してもらったところ、SさんとTさんを紹介された。その幹部がSさんとTさんの二人を選んだ基準としては、①ある程度地域（地元）のことに詳しいこと、②祭りにおいて中心的な役割を担っていること、の二点であった。<sup>11)</sup>

インタビュー調査は、主にメモを取り、会話は話者の了解を得て、録音をした。録音は文字に起こし、メモとともに質問項目に沿って再構成してまとめた。それを再び、話者に見てもらい、補筆修正した。とりわけ、話者には、筆者による方言（土佐弁）の標準語訳にも直接手を入れてもらった。したがって、下記のようにスムーズな体系的な記述は、直接的に対象者から語られたわけではない。

なお、以下の記述は、話者の語りを尊重した記述をしているが、補足箇所を（ ）やへなどで、語句の説明を補ったと

図1 四万十町と川口地区の位置



ころもある。さらに、インタビューの際に、話者が神職や祭りなどの用語を混用していることについても、話者の語りを尊重し、そのまま記述している。例として、神職は【太夫（たいゆう）・神主さん】、祭りは【神祭（じんさい）、お祭り】、神社は【お社・氏神様・お宮・神社】など。

## (一) 地域概況

当地区（図1参照<sup>12</sup>）は、四万十川上流右岸、支流井細川との合流点付近に位置している<sup>13</sup>。世帯数七一戸、人口一五七人（平

成二二年一〇月一日現在）の小規模集落であり、明治二二年の町村制施行、大正一五年の町村制施行、昭和三〇年の新町村を経て、現在は四万十町南川口となっている。史料における記述は乏しいが、人口の約三割（五九人）が六五歳以上の高齢者であり、七一世帯のうち、一人世帯（二五戸）と二人世帯（二七戸）が全体の七割以上を占める過疎集落である。集落の就業者の三割が第一次産業（農林漁業）に従事している。

## (二) インフォーマントのヒストリー

SさんとTさんの略歴（平成二五年五月現在）は次の通りである。

Sさんは昭和四四年川口生まれ。三人兄弟の長男。小学校は川口小学校。昭和六三年の中学から地元を離れ、明德義塾中学・高校卒業（野球部副主将）、平成四年に拓殖大学商学部を卒業などを経て二六歳のときに帰郷。現在の家族は祖母（大正一三年生まれ）、母（昭和二二年生まれ）、妻と、お子さんが三人（中三、中二、小二）。お子さんの今後の進路について今現在不明であるが、いずれにせよ、窪川には高校しかないので大学進学のためには地元から離れることになる。Sさんの現在の職業は、町議会の議員を務めながら家業の個人商店、新聞（高知新聞）の販売店や農業（自分たちで消費する分）にも従事するなど忙しい日々を送っている。

Tさんは昭和二四年川口生まれ。二〇歳頃の一年半か二年くらいを除いて、生まれてからずっと地元で生活している。地元役場の公務員勤めを経て、五九歳の時に退職して現在は地元で農業に従事している。三人のお子さんはみんな結婚して地元を離れている（県外〈奈良県〉に一人、県内〈同町内の別の地域〉に二人）。

(三) ライフヒストリーの分析

(1) 幼年期におけるお宮とのかかわり

以下では幼年期におけるお宮とのかかわりをSさんとTさんの発言からみてみよう。

ぼくらの小さいときはお宮で遊んでいた。小さい時、大元神社で一昔前に誰かが相撲をとっていたという話もあった。また、ここには六〇年くらい前に河内（かわち）神社（岩崎宮司兼務）の境内に保育園（戦後まもなく地元で作って、今は新築移転〈一五年ほど前〉）があつて、昼寝したり遊んでいたが今は小学校の近くに移転した。（Tさん）

戦後、河内神社の境内に併設された川口保育園の移転理由については、他の保育園が環境整備されていく流れによるもの

で、移転計画があつた当初から、協議会において大多数派——お宮の境内にある大木が倒れる危険性、虫や蚊による被害の恐れがあり、子どもにとって環境が悪い——と少数派——大木・樹木があるからこそ環境がいいのではないか——の意見に分かれ、実際の移転までは二、三年かかったが、結局は昼間も暗いことと、名木大杉の保存ということによって同じ川口地区の小学校北隣へ移転することとなった<sup>15</sup>。また、Tさんによると、戦後のベビーブームの影響があつた設立当初は地区内に子どもが三〇、四〇人くらいいたが、今は一〇人前後になつていて述べた。今の保育園には家地川などの子どもも通つている。次に、もう一つの発言を挙げてみよう。

この氏神様の神輿は秋祭りだけに出るが、お旅所が小学校のすぐ隣にあつて、僕らの子どもの時はあれがバス停だったと思つていて学校帰りにかばんを置いて、遊んでいた（秋祭りにしか使われないこともあり）が、実はそこがお旅所だったことを思い出す。（Sさん）

当地区の神社では祭りの際に今でも神輿が出ており、地域を練り歩く。近年までは、大型の古い神輿は出さずに保管しており、その代わりに新しくこしらえた神輿（資金の関係で小型になつてしまった）を出している。Sさんの小学生の時に大人た

ちが大型の神輿を担いでいたことを見て自分たちも担ごうとしたが、子どもには重すぎて無理だったことを覚えていた。大人用の神輿は社殿の中に保管していたが、二〇年ほど前に小学生用の神輿（子ども神輿）に作り変えて秋祭りに出しているようである。

ちなみに、川口小学校<sup>16</sup>では、祭りの時（一〇月二四日の秋祭り）は当地区の子どもたちを休ませて神祭への参加を許可しているところが特徴である。昼から祭りがあつたため、子どもたちは学校を休んで子ども神輿の準備をしたり担いだりしている。ほかの生徒の授業は通常通り行われるためほとんどの先生方は来ないが、中には子どもらの写真を撮りにきてくれる先生もいる。

## (2) 地域の変遷について（過疎の現況）

川口地区（旧窪川町川口村は、平成一八年の合併によって四万十町南川口になった）は、隣の口神ノ川（くちごうのかわ）の立目（たちめ）より西側にあることから立西（りっせい）と呼ばれている。当地区の世帯数はおおよそ六五世帯（平成二五年五月現在）であるが、世帯を分けて生活している場合があるため、正確な世帯数は不明<sup>17</sup>。区長が回覧板を回していく戸数が現在六〇くらいあることから、役場調べによる世帯数と実際の数は一致していない（一緒に住んでいても世帯を分けていたり

するため）。

以下では、まずSさんの話から地域の変化についてみていく。

地元を離れていた間の地元のことはなんも知らない（地元を離れてから帰ってくるのはお正月くらい。部活で野球をしていたからまともな休みがとれなかった）。しかし、帰郷してからも地域の変化はあまり感じられず、強いて言えば、空き家が増え、新しい家や町営住宅が建つたくらい。また、家族構成員が減って、戸数自体は減っていないこと（昔も現在も六〇世帯ほどで、戸数が減っていないのは一人暮らしが増えたことによるもの）が特徴。昔の家はあるが、新しい家が増えてきた。みんなが家で一緒に住んでいるのは珍しい。中学校の時までは大人が乗るものだと思っていたが、高校の時に周りのみんなが自前のバイクに乗っていたのを見て、時代の変わりを感じた。自分（Sさん）が車の免許を取りだした時も、一家に一台だったのがあつという間に一人一台になってきたと、みんなで話しかつたことがある。

一方で、Tさんは、物心ついた昭和二六、二七年頃の思い出を中心に地域の変化について次のように述べている。

私は戦後生まれ（団塊世代）だったので衣食住に関して不自由はなかった。この辺は車もなく、精々自転車であった（軽トラックもなく、たまに通る三輪モーターが珍しかった。子どものときは農業でリヤカーや牛を使っていたが、小学の時に父さんが手押しのトラックターを買ってきた）。小学校の頃に町にバイクが走り出して、それから車になってからの変化は早く、いつのまにかみんな車になった。まさに高度経済成長のおかげであると思う。しかし、この辺の発展は、大都市の経済成長とは多少の時間差があったと思う。テレビが入ってきたのが小学校の低学年の時、全員はもっておらず、わざわざ窪川まで見に行つたくらい。ラジオの普及も少なかった。情報はもっぱら新聞。一〇歳くらいまで。それ以降はテレビがどんどん普及していった。町がガラツと変わったのは小学校三、四年生の頃。中学生の時は今と変わらずなんでもある時代になっていた。その時から現代にいたるまでほとんどあるものも便利になつたくらいで、最初からできたものは少ない。モノ自体が便利になつただけだと思う（スマートフォンなどの細かいものを除いて）。テレビ、車などがなかったことが分かる世代は六〇代。それらが分からないのが四〇代。しかし、道が細かつたことくらいは今の四〇代でも分かると思う。私にとって戦前のことは、聞く話以外なにも知ら

ない。

Sさんは帰郷してから一八年経過しており、Tさんは長期間地元を離れたことがないが、地域の変化について両者の話に大きな差異は見られなかった。また、当地区における変化は周辺部の地区とおおよそ同傾向をたどっているものと考えられる。つまり、昭和二〇年代後半までの地方にはまだ都市部に比べて高度経済成長の影響が少なかったことが両者の発言からうかがえる。また、当地区の就業状況については、平地が多い当地区のみならず百姓（農業中心）だったものが、現在は専業農家が数軒のみ（三軒くらい）でほとんどが半農になっており、お米、ニラ・生姜・キュウリなどが主な生産物となっている。

### (3) 川口地区の祭りについて

以下では当地区の氏神様である河内神社の祭りの護持運営について、インタビュー内容から地域住民との関わりを中心に概観する。

#### 伝統芸能の衰退

Tさんが小学校終わり頃から中学入学前頃までは祭りにお伊勢踊りが奉納されていたが、担い手がないために中止となった（四〇年くらい前）。奉納（秋祭り、収穫祭）していた当時は、



子ども二人（踊り）、大人三人（太鼓、歌い手）でやっていたようである。また、祭りは昔から変わらず年三回行われているものの、奉納行事の中には廃れたものがある当地区では、過疎化する地域の氏神信仰について次のような声も出ている。

松生原の場合、祭りのときにどっさり帰っている。住んでいるのが街だったりしても祭りの時には帰ってくる。ここ（川口）はそうでもない。（Tさん）

従前同様、地域を離れても祭礼行事には必ずほとんどの住民が戻って来て積極的に参加していることで県内でも有名である松生原地区のケースは、今や伝統行事のほとんどが衰退傾向にある他の地域からすれば珍しい風景かつ特殊事例として知られている。しかし、伝統芸能を後世にしっかりと継承する努力が地元を離れた人々と氏神様とのつながりを保持させていることが地域の氏神信仰を継承するための最も有力なツールであることはどうやら共通意識として認識されているようである。

#### 例祭日の厳守がもたらす効果

地方において農業との関わりによる例祭日の変更届けが出されることは窪川町全体を含め、一般的に見られるものであるが、当地区の場合は現在も例祭日が変わっていない。その理由

をTさんとSさんの発言から検討する。

現代は仕事が休めず、祭りに参加できないケースも地域によってはあるが、とはいってもいまだに祭日が地区の休みになっているところもある。

右のTさんによる発言の背景には、確固たる理由もなく安易に例祭日を変えてしまうことへの恐れ、無暗に例祭日を変えたと子どもに祭事を守る大切さが説明できなくなる、などの理由がある。例祭日の意味について藤本頼生は「神社の祭日のなかでも例祭日、あるいは大祭日と呼ばれる日は、神社において特にその神社創建の由緒などにも深く関わっていることはいうまでもない」と指摘している<sup>19</sup>。そして、祭日は「祭祀の内容、形式とともに祭祀の中核をなす基本要素の一つ」として神社と人々の生活に密接な関係を持ちながら、それぞれの地域社会の社会的な要件や時代的な変遷によってその時期や期日も変化してきたと述べ、戦後の都市化や過疎化、あるいは少子高齢化などの影響による祭日の変化には、伝統の在り様においての意義にも変化がみられることを指摘している<sup>20</sup>。この意識の変化こそ、Tさんが最も懸念されるところであろう。

それに関連して、もうひとつSさんの発言を挙げて検討してみよう。

私もその話は聞く。時々帰郷した際に、土日のほうがよくないか？ といった話が出ていた。しかし、土日に仕事がある場合があるから、ここは日にちが決めているから決められた日にみんな集まってもらったほうが良いという話になった。

以上、二人の発言からは、社会状況の変化が地域に影響を及ぼしていくなかで、地区の伝統護持としての氏神信仰の継承を図る目的として例祭日を固定化してきたことが分かる。また、それは後述の松生原地区における奉納芸能（伝統芸能）を媒体として氏神信仰を継承していく村の先人（先輩）たちの努力によって常に祭りが賑やかになることとは対照的である。

他方、両者による発言の中では、昭和三〇年代に政府の指導のもとで、村の例祭日を統一するという動きがあったが二、三年でもとに戻ったことについて以下のように述べている。

（話し合いから例祭日を固定することに決まった）ただ、途中で窪川町全体において神祭の日を統一しようという音頭があった。それは、行政の働きかけがあった。たとえば、ここの秋祭りは一〇月二四日であったものを一月三日（文化の日、明治天皇の誕生日）に統一しようとし

た。昭和三〇年代のことだったと思う。しかし、結局は地区ごとに異なる祭事を一緒にすることを憚る傾向にあることが問題となって二、三年でもとにもどった。（Tさん）

このような村の例祭日統一をめぐる出来事は、①神職にとっては生活にかかわる、②これまでは祭日のたびに謝礼がもらえたが、一日になってしまうと、収入（社入）が減る、などの理由から元の例祭日に戻したとする氏子側の意見に対して、収入問題が直接理由ではなく、結局は神主のいない祭りに意味がないと氏子自ら悟ったために続かなかつたとする神社関係者の間には意見の食い違いがみえた。いずれにせよ、一人の神職が多い場合は三〇社以上を兼務する状況下で、最低でも一時間ほどかかる祭りを一日でこなすこと自体が物理的に無理であることが、元通りになった原因として最も有力と考えて間違いないだろう。

#### 直会で深まる地域住民間の交流

当地区では、他の地域の祭りを見に行つたことはあまりないが、祭り（主に神事）以外の宴会（直会）や出店に行くことはよくあるという。その様子をSさんとTさんの発言からみていく。

今はほとんどなくなってきたが、昔は他の部落の神事には参加せず、神事の後、直会には親戚関係をみんな呼び集めて結構賑やかだった。日が変わるといことは、お互い同士が行き交わす。もとの自分自身の出身地へ帰るとか、というような行き来がずっとあった。たとえば、今日は川口、手前にどっかやるとする、この家、地域の家々が直会をやるのでおいでやといつて、何軒か行ったり、嫁いだ人が一年に一回その日に帰って来るとか、というような交流（地域の習慣）が盛んだった。

学校の先生なんかは、神祭時期になると、毎日のように（部落によって神祭の日が違うため）自分の教え子の家を順番にまわっていた。（Sさんの場合、曾祖父の時から酒屋も兼ねていたので）昔は神祭時期（とくに秋祭り）になると、毎日のように軽トラクに酒をいっぱい積んで各家に運んでいたことを覚えている。昔は地域のお酒屋さんしかなかつたからそういうやりかたができた（今はどの地方においても大型スーパーが入っており、酒が割と簡単に手に入る）。

以上のことから、地域と地域の間を直会がつかないでいたことがうかがえる。神社ではなく、直会をする各家にゆかりのある人（嫁いで行った人、友人など）をどんどん呼んで年に一回

帰って来るのを楽しみにしていた。直会の日は、集まった家族と友人で賑わったのである<sup>21</sup>。つまり、祭り時期になると、どこかの部落で必ず毎晩直会が開かれ、そこに集まった人たちの間では人的・信仰的な交流が図られていることが分かる。

#### 当屋（当頭）制度の変容（当地区では当人制度）

当地区のお宮の祭りに大人たちの参加は、仕事があっても当人（とうにん）にあたった人たちは参加している。秋祭りに比べると、春と夏の祭りは簡素で、直会はお宮の境内（社殿内）で簡単に済ませるようである。当地区の毎年三回ある祭りは、現在も当人が中心として地域の人が参加する形で続けられている。また、そのような当人を中心に行われる祭りのことを、当地区では「当人さん祭り」と呼んでいる。ちなみに、当地区に限らず、当屋制度<sup>22</sup>については、地域によってその呼び方および性格が異なっている。特筆すべき点として、明治以前の古い姿はともかく、「神社の奉仕に当たって、神社境内の掃除や神饌の献備をする」といった一般的な当屋制度<sup>22</sup>が基本になっている。当地区の当人さん祭りには、祭りの担い手としての負のイメージが膨らんだ時期があった。以下では、そのような当地区の当人さん祭りの変遷についてTさんの発言を中心にみていく。

当地区には「当人さん祭り」という悪い意味の言葉があ

る。要するに、祭りに当人さんしか来ないという、そこま  
でしぼんでしまった時期があった。当人祭りみたいになっ  
ているから、無理にあてられた人だけが来てほかの人らは  
関心がなかった時期があった。今は地域の人々が集まっ  
てくれている。毎回二〇人くらいは来てくれると思う。  
でも、それは克服したあとの話。Sさんが戻って来る前  
の話で、次世代会議ができた今から一〇年くらい前。

つまり、従来の祭りが帯びていた負のイメージが「次世代  
会議」によって多少緩和されたことが述べられている。その次  
世代会議の背景についてももうひとつの発言を挙げてみよう。

（それには色々問題があった。みんなに負担が重すぎ  
て）当地区にはもともと山の上に大元神社（非法人）とい  
うのがあって、それから河内神社が下にあるわけだが、昔  
は、まず山の上にある大元神社でお祈りをあげて、祭りは  
まとめて下の河内神社で行っていたが、毎年道なりをしな  
がら大元神社にお参りしないとけないという行事があっ  
て、それがなかなか皆負担と感じていたので、それを機に  
山の上にある大元神社を下に降ろして合併しようとした動  
き（話）があった、しかし、それを合併したら不幸が起き  
るといふ人が町長をはじめ大勢出てきて騒ぎが起こったこ

とをきっかけとなり、地区の若い衆が集まってできる限り  
上のお宮も今まで通りやっていこうという時にできたのが  
「次世代会議」である。（Sさん）

すなわち、若い衆が中心になって神社を合併せずにお宮を盛  
り立てていくことを目的として掲げて結成したのが次世代会  
議であった。言い換えれば、この次世代会議の発足は、もともと  
当地区の古いお宮であった大元神社（非法人、現在は山乃神を  
含め飛び地境内社となっている）が、山の頂上<sup>24</sup>にあるのでな  
かなか行けず、管理しにくい面があったことから、この大元神  
社を一回降ろしたことが結果的に世間を騒がせた事件となったこ  
とに端を発している（六〇年以上前に）のである。これにつ  
いてTさんSさんによる発言を挙げてみよう。

昔ひと騒動があった際は、下に遙拝所を作って神社を降  
ろしたら何人かがお亡くなりになったという出来事が言伝  
えとして村に残っていたが、今回の場合もその時と似たよ  
うな発想で降ろそうとしたのであった。それに対して部落  
の長老たちをはじめ多くの反対があったので、若い世代の  
者たちが話し合いをもって、係るのが当人さんだけになる  
のは負担がかかるのは大変だから、いけないときは若い者  
に声をかけてくれと、そうすれば協力するからと、「でき

るものがあるうちは、そういうふうにして続けていきましよう」と提案した。

結局、お宮をめぐるこのような騒動は、険しい道なり（山の頂上にあり、車でもいけず通路も山刈りをしながらいかないといけないくらい）を行くしかない大元神社の秋祭りだけのために、事前に山道を刈り上げて掃除するといった事前作業が負担になってきたために、下に降ろそうとして起きたものであった。

このようにして当地区では、次世代会議の結成によって結果的には一度は当人だけの祭りにまで沈んだものが再び全員が参加する祭りとして復活した。その様子をTさんとSさんは以下のように述べている。

秋祭り（大祭）にはそこそこ集まっていたが、春・夏祭りが当人祭りみたいになっていた。次世代会議ができてからは全部の祭りに集まり出した。河内神社で宮司が祈りこんだものをもって大元神社に奉納して（大元神社は歩いてら三〇、四〇分かかる）から河内神社の祭りが始まる。現在は毎年祭りをしているので道の茂りはなくなってきたがやはりしんどい。

しかし、その一方で、こうした地域で起きた一連の出来事か

ら生まれた次世代会議の活動には、古くからの言伝えや崇りを恐れる側面が比較的強い傾向にある旧世話人（長老側）と、どちらかといえば新しいもの（行事）、合理的な問題解決を好む傾向にある現在の世話人側が、互いに意見を出し合い、時には葛藤しながらお宮の世話や祭りの役割などを決めていることもインタビュー調査で明らかになった。その様子について次世代会議が中心となって近年新たに展開している行事を挙げてみよう。

当地区には年越し行事があり、除夜の鐘を打つ時間にお宮にみんな集まる（二〇人くらい）。太鼓を鳴らして年越しの少し手前（二八日）に餅をついて、鏡餅用を残しても相当余るのでみんなに配る。これも次世代会議ができてから始めた行事。それまでも年越し行事自体はあった。神社総代が中心となって行っていたが、大々的に発展させたのが若い衆（次世代会議）である。しかし、若い力というのは今後欠かせない重要な存在であるが、時によってはマイナス効果を及ぼす時もある、非常に難しい。

右のSさんの発言からは、祭りの活性化を図るために様々な活動をしている若い衆（次世代会議）に対して旧世話人（氏子総代<sup>26</sup>）が次世代へ継承するよう、つまりただのイベントや一夜

限りの騒ぎで終わらせないように牽制あるいは指導にあたっている様子が窺える。

(4) 地域とお宮の関係について

以下では、地域とお宮の関係についてTさんとSさんの発言を挙げて検討する。まずはTさんの発言から見てみよう。

我々の場合、お宮に関わることが年間行事（年中行事）の中に組み込まれていて、宗教という形、感覚はない。生活の一環・生活の一部としての感覚であるため、神社を抜きにして生活が語れない。たとえば、お宮だけでなく、お寺の場合も「施餓鬼供養」のような様々な行事があり、その一つ一つが個人や教団の行事ではなく、部落の行事として組み込まれているので、いわば、特別にお宮だから、お寺だから、宗教の一部であるというような感覚はまったくない。宗教をもってするという言葉は誤解を招く。しかし、信仰があるとは言える。

Tさんの発言からは、松平誠が指摘するような「カミはムラの存続と繁栄にとって何より大切な存在であり、生活の基本でもある。そのカミを迎えて毎年繰り返し返される祈りと感謝の行事」<sup>(26)</sup>が、祭りあるいは神道であることが窺える。そ

して、そのような感覚は、実際にお宮と関わりながら形成された、いわゆる経験的概念に基づいており、いまだ農耕社会の性格が祭りに生かされている当地区に根強く残っていると考える。また、この点については、かつて原田敏明が『村の祭祀』（昭和五〇年）において指摘したように「もともと農耕生活によって農村的なものが都市的なものへと移り変わったとしても農村的なものを中心として、それを出発点として考えていくことが最も妥当」<sup>(27)</sup>であるところがまさに当地区の祭りに対する氏子意識の原点を示していると考ええる。さらに、これに関連してもうひとつSさんの発言を挙げて検討してみよう。

自分は中学以降地元の外にいて、二六歳の時に帰ってきて初めて地域の行事に参加するようになって神祭って小さい頃はなんのことだろうと考えていたものが、帰ってきた時に考えてみると、今年の豊作を祈願することや収穫への感謝といったいわゆる農業と密接な関わりをもっていったことを感じた。昔からある自然宗教的なものを今の新興宗教と同じ扱いされるのは違和感がある。自然宗教というか、自然に対する感謝のような感じが僕の氏神祭りの感覚である。

Sさんの発言が示唆するところは、祭壇・神棚を設えての参

拝を厳守するといった形式にこだわるのではなく、常に自然の恵みに感謝する（感謝の毎日）のが神道（氏神信仰）であるという点であろう。つまり、自分が地元に住んでいて感じた「一年の節々の行い（行事）」と密接な関わりがある、「昔からの自然宗教的なものであると理解して「お宮を世話している」などの行為が、近年の新興宗教と同視される傾向にあることへの違和感が示されているのである。要するに、当地区のほとんどの住民にとって神道は、「自然の恵みに対して神様に感謝する」、「稲作と深いかわりをもっている」など、住民の生活上に標準化（スタンダード化）されている宗教なのである。問題は、神社を取り巻く社会環境の変化が益々厳しくなっていく中で、とりわけ戦後の行政や民間による神なき祭りや神なきイベントにみるような固有の地域性や伝統性がなく、流動性や合理性、匿名性の概念のうえにたつもの<sup>29</sup>、つまり地域に根付いた文化、習慣、宗教などをうまく取り入れて他の地域に適応しようとするもの（ローカルアダプテーション）と前述の標準化されている宗教との間に生じたギャップに、自分たちとは異なる宗教観を見出している点であろう。このことについては後で詳しく分析することにして、ひとまず、このような氏子意識は、本研究における調査対象地域のうち、とくに伝統的村落型集落に共通して現れる現象であると考ええる。

一方で、過疎地域とお宮の関係について、とりわけ神社と寺

院の維持の仕方における差異を強調するTさんとSさんの発言を挙げて検討してみよう。

お寺と違って、人がいなくなると同時に神社は維持ができなくなる。そこに合併という安易な対策や考えはない。そのようなことが現実的になるのがここより奥に五軒ほどの折合という地区がある。その手前の松生原地区はうんと熱心であるが、折合には若いのがいないから、あと一〇年か二〇年かからないうちに地域統合があるとしても、氏神に関する問題はそう簡単にいかない。

発言からは今後の神社の護持運営には何と言っても人手が必要不可欠であることが強調されていると同時に神社の護持運営に関する問題を、単なる人口増加だけでは解決できないことが示されているのである。つまり、地域が連なっていることで近い将来に合併が進み、人口増加によって氏子が増えたとしてもそれぞれの地域における固有の氏神信仰の統合までは望めない、といった懸念が示されているのであろう。

#### 四 おわりに

前節で見た四つのテーマ（①幼年期におけるお宮とのかかわ

り、②地域の変遷、③地区の祭り、④地域とお宮の関係)をまず確認しておきたい。

①幼年期におけるお宮の記憶については、SさんとTさん両者とも遊び場として親しんでいたことが共通点として挙げられる。それにはお宮の境内に併設された保育園と小学校近くのお旅所の存在との関わりが大きかったと考えられる。

②地域の変化については、両者の思い出に大きな違いがあった。世代の違いとの関係もあるが、少年期から青年期にかけて地元を離れていたものと、そうでない者の記述には、地域の変化についての語り、前者が断片的な観察からの概況、後者が継続的な観察による詳述が見られた。

③当地区の祭りについては、両者の発言を、担い手不足による伝統芸能の衰退、例祭日を厳守することで継承される氏神信仰、お宮の祭りによって地域を超えてつながる地域住民との交流、当屋制度の変遷から生まれた新たな神社教化活動、の四つに分けて祭りの運営護持にどのように関わっているのかを概観した。

④最後に、地域とお宮との関係については、両者とも神道・お祭りを地域の宗教または農耕社会における村の行事として認識と、家の宗教、つまり既成宗教教団と同一されることへの違和感を示していることを指摘した。

以上、本研究では、お宮と氏子とのかかわりについて、対象

者の全体的人生(生活)の把握から主観的に意味づけられた氏神信仰が、どのように現れているのかを、ライフストーリー全体を見渡すことで可能であったことを示した。筆者は、今後も地域社会の変化と氏神信仰との関係について継続して調査を行う予定であるが、本研究で分析が十分ではなかった次の二点を重要課題として挙げておく。一つは、氏子におけるお宮と宗教に対する異なる観点に既成宗教の存在が関係していることが浮上したことから、今後は対象地域の変遷を仏教教団以外の新宗教教団の展開にも着目することである。もう一つは、隣接する地域との比較研究を行うことである。今後は当地区と相互関連性が見られる周辺地域を対象に調査研究を行っていきたい。

#### 謝辞

本研究の調査とインタビューにおいて、川口地区の方々にご多大なご協力を頂いた。とくに、忙しい中、快くインタビューに応じて下さったS氏とY氏に、厚く感謝の意を表す。また、現地調査において、高岡神社・三熊野神社の岩崎清海宮司(現、高知県神社庁高岡支部長)には、長い間借しませぬご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

#### 註

(1) 詳しくは、過疎地域における神社神道の変容——高知県高岡支部の過疎地帯神社実態調査を事例に——『総合人間学会』、平成二



六年六月刊行予定。および、過疎地域と神社——高知県高岡支部旧窪川町・旧大野見村を事例に——『國學院大學神道研究集録』第二六輯、平成二四年三月を参照されたい。

(2) 塚田は、ライフヒストリー・インタビューの特徴の意識に基づき、他の研究にも言及しながらライフヒストリー・インタビューの意義と有用性について論じている。また、彼の主張、つまり「数量的分析的手法がマクロレベルの大きな流れを描写する手段として有効に働くのは十分知っている。ただ、数量分析をやっていく中で、どうしても接近することができない人々の意識、感情レベルの問題をとらえたいと思ったとき、ライフヒストリー・インタビューが最適な方法になるであろう。」とするところは、本研究における筆者の主張とも一致している。詳細については、塚田守「ライフヒストリー・インタビューの可能性」『椋山女学園大学研究論集』第三九号を参照されたい。

(3) 石井研士「氏神信仰の10年」神社に関する意識調査」から『第三回「神社に関する意識調査」報告書』神社本庁教学研究所、平成一九年（六七〜七八頁）、六七頁を参照。なお、神社本庁が実施した実態調査は、『都市団地と神社—実態調査報告—』神社本庁調査部、昭和三八年、『神社運営法 第二輯』同、同三九年を指す。両調査についての詳述は控えるが、対策としては以下のことが述べられている。まず、『都市団地と神社—実態調査報告—』では、関東一都七県に、東海、近畿並びに山口、福岡など計一九県を対象に実態調査が行われた。報告書の内容のほとんどは、神社と団地の基本的諸問題について述べられている一方で、団地を利点として捉えているところもあった。次に、『神社運営法 第二輯』では、地方における小規模神社が抱える問題を明らかにし、今後の維持運営

法の改善・向上対策を目的として関東一都七県を対象に行った調査の実例をまとめており、最後には参考資料として神社興隆対策の実例が紹介されている。

(4) 戦後の社会変動を特定の地域に限定して行った実態調査については戸川安章「近代化と神道」委託調査報告「椋尾神社」調査報告『國學院大學日本文化研究所紀要』第二輯、昭和四三年を参照されたい。

(5) 前掲戸川報告書、一三三〜一三四頁参照。戸川は、調査の結果から①氏子離れを申し出た人の意見として、お寺には二重檀家という概念がないのに神社には二重氏子というものがあるのが判らない。部落の産土様を維持してゆくのも大変なのに、よその部落の神社の経費を負担したり、神宿をつとめたりするのは容易なことではない。②祭礼の簡素化については、人間の生活様式が変るように、祭礼も時代と共に変わっていくのは当然ではないか、という意見が多かったと述べている。

(6) 前掲石井「氏神信仰の10年」神社に関する意識調査」から「六七〜七八頁を参照。

(7) 前掲戸川「近代化と神道」委託調査報告「椋尾神社」調査報告」序文、一一五頁を参照。

(8) 前掲石井、七八頁。

(9) 代表性・信頼性・妥当性については、川又俊則・寺田喜朗・武井順介「序論ライフヒストリー・アプローチと宗教社会学」『ライフヒストリーの宗教社会学—紡がれる信仰と人生—（ハーベスト社、平成一八年）五〜二四頁のうち寺田執筆担当の一〇〜一三頁を参照。寺田は、インタビュー・データに依拠する研究が抱える方法論上の問題は代表性・信頼性・妥当性という三点に集約されるとし

ている。まず代表性については、「どのような理由で特定の語り手とインタビュー資料が選ばれたのか」という選択基準を明記する手続きの重要性が指摘され、信頼性については、同じインタビューメントに他の調査者がインタビューを行った際、同じような語りが得られるか、という問題が指摘される。そして、妥当性については、研究者が見ようとしているものを実際に見ているかどうか、あるいは、調査結果が研究の目的や期待にかなっている程度という問題が指摘される。また、寺田は、これらの問題について信頼性は量的調査では重要な基準であっても生活史のような質的調査においては、大きな意味を持たず、妥当性こそが優先される基準であるとするK・プラマーの論を引用し、特定の社会集団における語り手の位置を確定し、データ収集プロセスを透明化し、当事者の語りの集積から分析カテゴリーを帰納するライフストーリー・アプローチは、これらの三つの問題にも一定程度対応可能な方法であると述べている。

(10) なお、混乱を避けるために、用語の整理をしておく。多くの先行研究者たちの議論を踏まえ、本研究におけるライフストーリーの定義は「ある個人が過去から現在までの時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録」つまり、「個人の生活史」を重視した川又の定義に従うことにした。川又俊則「ライフストーリー研究の基礎―個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教」創風社、平成一四年を参照されたい。ちなみに、インタビュー手法におけるライフストーリー研究において、オーラルヒストリーとの相違、またはライフストーリーとの相違について桜井厚、やまだようこ、御厨貴など、多くの研究者による議論がなされている。そのような用語をめぐる議論は本研究の目的ではないため、ここでは割愛するが、混乱を防ぐためにも用語の整理は重要な作業である

ので可能であれば次稿以降で考察を試みたい。また、この点について参考論文・文献として、亀崎美沙子「ライフヒストリーとライフストーリーの相違―桜井厚の議論を手がかりに―」『東京家政大学博物館紀要』第一五集、平成二二年、一一―二三頁、中川恵理子「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営研究』第三四号、平成二二年、九九―一一二頁、江頭説子「社会学とオーラル・ヒストリー・ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』五八五号、平成一九年、一一―三三頁、川又俊則「ライフヒストリー研究の断層―特に方法論に関して―」『市民文化』第一九号、平成八年、三三―五六頁、中野卓・桜井厚「ライフヒストリーの社会学」弘文堂、平成七年などを挙げておく。

(11) ちなみに、Sさんの場合は長期間に亘って地元を離れたことがある。にもかかわらず、前述の基準を満たしている点については、お宮と祭りに深い関係にある商店を代々営んできた家で生まれ育ち、地元に戻ってきてから家業を継ぎ、町会議員を務めながら、氏子活動にも積極的に参加しているなどの理由から対象者として選定した。

(12) 図1は、四万十町公式ウェブサイトの地勢・概要の図を参考に筆者が修正加工したものである。 <http://www.town.shimanto.lg.jp/life/detail.php?dnKey=1318>平成二五年五月二七日最終アクセス。

(13) 『角川日本地名大辞典』39高知県、角川書店、昭和六一年、三四七頁。

(14) 過疎法では、各自治体の人口と財政力から、自治体を過疎とする(過疎法第二条第一項、第三二条、過疎)、自治体を過疎とみなす(同法第三二条第一項、過疎みなし)、自治体の一部区域を過疎

とする(同法第三三条第二項、一部過疎)の三つに分けて「過疎閑係市町村」と呼んでいる。そのような過疎法に基づく高知県下の過疎市町村は、平成二六年四月一日現在二八市町村のうち、二四の市町村が過疎法第二条第一項に該当する過疎地域となっている。なお、本研究における対象地域の選定基準は、①高知県が九州地方と並んで典型的な過疎地域であること、②全国で神社数をもっとも多い(人口比)地域であること、であった。

(15) 『窪川町史』、平成一七年、九六六頁。

(16) 「四万十町立小中学校適正配置計画」(四万十町、平成二〇年九月)によれば、川口小学校は、窪川・立西地区の東側に設置され、同地区の西側には家地川小が設置され、地区外であるが東側に隣接して口神ノ川小が設置されている。川口小は、主に川口保育所を卒業した幼児が入学し、卒業後は、主に窪川中へ進学する。学校規模は、平成二六年度において児童数二二人、完全複式の三学級、全学年で一〇人未満と「四万十町における適正規模」の確保が難しい状況である。なお、川口小学校の通学地区は当地区(南川口)のほか隣接する檜生原、寺野、天ノ川、秋丸、折合を含めて六地区。詳細については学校教育情報サイトガッコムを参照。http://www.gacom.jp/schools-34832.html平成二六年四月三日最終アクセス。

(17) 行政による世帯調査では、名字が同じ場合でも一世帯計算にしており、その場合の当地区の世帯は八〇世帯以上になる。川口に限らず、旧窪川町の各地区の人口(世帯数)は、総鎮守である高岡神社(通称五社様)に納めている氏子費から割り出すことが可能である。しかし、近年、氏子費を個人で払ったり、まとめて区長に払ったりすることが起きており、そのような地区の場合、人口の把握は難しい。

(18) 稲作の場合、年一回、盆地であることと日中の気温の差があるために、早生を植えている。普通は五月終わりから六月の頭まで植えるがこの辺は他所と比べて少し遅い。ニラの場合、準備はあるが、大体三月から一〇月の終わり(霜が降りる頃まで)までが収穫可能。現在のニラ収量は少なくなってきた。キュウリは、九月から五月中ごろ過ぎまで(五月いっぱい)のハウス栽培が中心となっている。

(19) 藤本頼生「神社の祭日変容をめぐる現状と課題―祭礼日の近代化―」(『神社祭祀に見るモノと心』プロジェクト)『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第二号、平成二二年三月、四七頁。なお、藤本の祭日に関する記述は、以下の論考を参照しているため、併せて記しておく。柳田国男「祭日考」『柳田国男全集16』筑摩書房、平成一一年一月。阪本是丸「改歴と祭日」、『近代の暦と祭祀』『近代の神社神道』弘文堂、平成一七年八月、七九〜八四、二四二〜二四六頁。

(20) 前掲藤本「神社の祭日変容をめぐる現状と課題―祭礼日の近代化―」四七〜四八頁。

(21) Tさんとのインタビューでは、そのようなこと(連日にわたる直会は角が立つ)が、行政による祭日を統一しようとした一つの原因になっているのではないかと述べたが、事実との関連性については不明である。

(22) 当屋制度については、原田敏明『村の祭祀』中央公論社、昭和五〇年が詳しい。原田によれば、「当屋というのは、その家についていい、当人というのは、その人について称するのであるが、内容においては大体に同様の事柄を指しているといつてよい。なおかつそのほかの地方においては、これと同様な制度についても、いろいろ

ると違った名称をもって呼んでいる場合も少くない。しかしこれにはそれらを当屋または当人という語をもって代表させることが、最も穏当であろう。」(一六四頁)と述べている。

(23) 原田によれば、現在の当屋制度というのは明治以後の神職専任の制度実施に伴う変化であって、直接に神社に奉仕するといった本来の当屋制度としての機能の喪失または退化した、きわめて単純化された形式で残っているものであると指摘している。(前掲書、一六六頁)

(24) 大元神社については、鎮座地に最も近いところの人たちによれば、「一番朝日が早くあたる山のとっぺん」であると述べていた。筆者は實際足を運ぶことは出来なかったが、提供して戴いた多くの祭り関連資料の中には、氏子によって神社までの道が作られていく様子が写っている写真もあった。

(25) ちなみに、当地区では氏子総代(または責任役員)が満たなくて法人が維持できないといった問題の対策として、親が総代である人や長老格に総代に入ってもらっている。

(26) 松平誠『祭りのゆくえ―都市祝祭新論』中央公論新社、平成二〇年、六頁。

(27) 原田敏明『村の祭祀』中央公論社、昭和五〇年、二〇九―二一〇頁。

(28) ちなみに、この違和感という発言は、宗教団体のうち、とりわけ新興宗教を特定して批判する意味で使用しているわけではない。もともと地域にあった宗教と異なる接し方をとる他の宗教の総称として使用していると推測できよう。この点については、芦田徹郎が『祭りと宗教の現代社会学』(世界思想社、平成一三年)において、多くの日本人が理屈抜きの拒絶反応として宗教とりわけ新宗教に強

い警戒心を示していると指摘するように、日本人の宗教性の変容を捉え直し、新興宗教の布教活動が伝統的村落型集落にもたらした影響を踏まえて稿を改めて詳しく分析したいと考えている。

(29) 詳細については、小松和彦「神なき時代の祝祭空間」、出島二郎「地域イベント発・偽祭のパフォーマンス」いずれも小松和彦編『祭りとイベント』小学館、平成九年、五―三八頁、二二七―二五六頁に収録。藤本頼生「地域社会の変容と神社神道―無縁社会・ファスト風土化する社会のなかで―」『神社本庁総合研究所紀要』平成二三年、一六―八五頁を参照されたい。